

「出題の意図」

選抜区分	2025 年度 （選抜区分：一般前期） 文学部 人間関係学科 （科目名：小論文）
出題の意図 （評価のポイント）	出典は、日経サイエンス 2024 年 03 月号に掲載された、ワシントン大学人類学科長の R.J.レスターによる「解離性同一性障害 — 新たな治療のアプローチ」であり、英文の原題は“The Community of Ella”（SCIENTIFIC AMERICAN June 2023）です。 人間関係や人間性を考えるためには、心の問題だけではなく、文化や社会や環境についての知識や考察が必要です。今年度は、学問領域を横断して人間関係全般を研究する本学科らしい考え方を論述できるように課題文をえらびました。 比較的長めの日本文がきちんと読み込めるかどうかをみるため、あえて原文の事例を多めに残しています。高校生にとっては新規な知識もあるかもしれませんが、ていねいに読めば決して難しい文章ではないでしょう。むしろ人間関係学科の受験生にとっては興味深い内容だったと思います。 ＝ 問1は課題文を読みこむための誘導として設問し、問2は論旨の理解を確認するために設問しています。課題文にあげられた複数の事例を手がかりに、的確に論旨を理解できているかどうかで解答に差が出ると思います。問3の小論文の「そこから生まれる人間関係のありかた」については、こうした手がかりを参考に、自分の考えやアイデアを自由に書いてほしいと思います。 問1 下線部①にある、「健全な自己」に関する私たちの思い込み、とはどういうことをさすのか、本文をもとに「健全な自己」「私たち」の内容に言及し説明せよ。（40 点） （解答例・以下のふたつの内容にふれていること） （a）現代の西洋文化になじんだ私たちは、自己を、境界がありユニークで統合された感情認識と判断や行動の中心と考えている。つまり健全な自己とは人間の核であり、体験の中心であり、自分を自分たらしめている基本的な側面であると考えている。 （b）しかし、このような自己に関する理解は決して普遍的ではなく、西洋文化になじんだ私たちの思い込みにすぎない。人類学者は、以前から自己に関する考え方が世界中の文化圏で大きく異なることを報告してきた。 ＝ まずは「健全な自己」に対する説明である（a）の内容を示してください、さらに「思い込み」の説明をもとめているので、（b）のように、それが西洋の文化に基盤を持つ私たちの思い込みである点までふれておく必要があります。 問2 下線部②にある、本当に人間的であるためにはどうしたらよいの

かについて、本文に即して説明せよ。(40 点)

(解答例・以下の内容にふれていること)

たとえ一つの人格の統合や融合にいたらず、標準的な治療ガイドラインに従えばまだ「完治」していなくても、複数の人格(パーツ)が一つのコミュニティのように協力し会話をし、日常生活に支障をきたさなくなればセラピーは成功したと考えてよい。

だれにとっても人生は完璧ではない。したがって内的世界を理解し、それと対立するのではなく連携して取り組むために、標準的なモデルには当てはまらない健全な自己が存在する可能性を考えるべきである。

人間的であることとは耐え難いほど苦しいことなのかもしれない。しかしそんな非常な困難の中でも前に進む道を見つけることが大切である。

==

「標準的な治療ガイドラインから外れていても成功と考える」「標準的なモデルには当てはまらない可能性を考える」、こうした内容やアプローチについて説明されていればよいと思います。さらに、完治させることだけがセラピーの目標なのではなく「本当に人間的である」ことは本来苦しいことである、という最後の著者の指摘に気づいた解答については高く評価しました。

問3 著者が述べている人間の普遍性と文化的多様性に対する考え方をもとに、人間を理解するために必要な視点と、そこから生まれる人間関係のありかたについて 800 字以内で述べなさい。(120 点)

「自己に関する理解」や「人格」という概念ひとつとっても、そこには多様な文化的背景があり、地域や社会によってさまざまに異なり、それは決して普遍的な概念ではない。私たちが人間を理解するためには、そうした多様な違いを理解し、「白か黒」ではない別の視点を持たなければならない。

本文の DID 事例と同様に実際の人間関係も、個人の人格だけを問題の対象に捉えるのではなく、コミュニティの中のコミュニケーションに焦点を置くと解決の糸口が見つかる。

そのためにたとえば、さまざまなコミュニティと関わり、理解しようとする姿勢も大切である。自分の出自とは異なるコミュニティに赴き、そこで暮らす人々の話に耳を傾け、彼らの生活の仕方や相手との関わり方を観察し、そこから学ぶことが、他者や人間関係のあり方を考える可能性を広げてくれる。

著者は人類学を学ぶ中でこうした経験を持つことで、標準的な解決方法にとらわれず、前に進む道を見つけることができた。病気でであろうと健康であろうと、本来「人間的である」ことは困難で苦しいものなのである。

==

本文の文脈に沿って述べれば、上記のような「人間を理解するために必要な視点」をふまえていることが基本になると思います。多様な他者への理解と、困難な経験を相手に耳を傾け観察することで乗り越えることなどで

	「そこから生まれる人間関係のありかた」については、論述されている受験生それぞれのアイデアや考えをもとにしっかりかいてほしいと思います。問いは人間関係一般についてのありかたなので、内容は必ずしもセラピーや臨床に関することでもなくともかまいません。家庭や学校や異文化体験など自分の知っていることを元に、本文にあるような視点を持つことで、それがどのように変わるのかが書ければ良いと思います
--	--